

4. 奈良市の緑の基本方針

4-1 基本理念

古都奈良の緑は、人びとの営みと自然とのかかわりを通して、長い歴史の中で培われ、現在に受け継がれた、歴史的・文化的な緑とすることができます。

奈良の古くからのまちに隣接して、春日山原始林、若草山をはじめとした大和青垣の緑が連なり、北部と西部には、樹林、ため池、農地などからなる丘陵地の緑、さらに南部は平城京の条坊や条里の跡を残す農地が広がっています。また、盆地の中には昔から歌に詠まれ親しまれてきた佐保川や秋篠川などの流れもみられます。さらに、盆地の東部に位置する大和高原には、広大で多様な森林と、田畑、茶畑、集落などの田園が広がり、良好な自然環境が保たれています。

緑は、四季の変化を通して、人々の生活に豊かさや安らぎを与えてくれます。とりわけ現代の都市において、緑が市民生活をささえる社会基盤の一つとして、環境保全、レクリエーション、防災、景観形成など、多様な役割を複合的に担っていることは重要です。さらに、緑は地域の生態系の要であり、人間および多様な生物の生命をささえる基盤となるものです。温暖化など地球規模の環境問題が広がる中で、低炭素、循環型、自然との共生など、持続可能な社会の実現が求められており、森林や農地などの緑を保全する重要性はますます大きくなっています。

奈良市は、日本の歴史・文化を代表する国際文化観光都市を標榜しております。古都奈良のシンボルといえる、野生の鹿が生息する奈良公園や貴重な遺構・遺物を埋蔵する平城宮跡は、先人の努力によって守られた大切な歴史・文化的財産です。「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録された社寺境内地も多く、緑の歴史的価値はさらに高まっています。その一方で、市街地の発展により、古都奈良を取り巻く緑は減少傾向にあるほか、竹林の拡大やマツ枯れ、荒廃林の増加など、緑の質の低下も進んでいます。

古都奈良の風格のある緑は、奈良市民の誇りです。人と自然が共生する生活文化の中で守られ育まれてきた奈良の緑のありようは、まさに緑の文化であるといえます。先人から受け継いだ豊かな緑を守り育み、未来に引き継ぐことは私たちの責務です。

古くから人びとの営みを通して守られてきた森林や田畑、川やため池など、豊かな緑を未来に引き継ぐためには、これまでの人と自然のかかわり方に学び、新しい時代の人と自然のあり方を模索しながら、地域固有の緑を保全・再生し、また新たに創出していく必要があります。

市民・事業者・行政が連携・協働して、これまで培われてきた古都奈良の緑の歴史・文化的財産を守り、人びとの創意を集めて、豊かな緑とそれをささえる緑の文化を未来につないでいくために、以下の理念をかかげます。

緑の基本計画の基本理念

歴史と自然と生活文化が織りなす緑の古都 奈良

悠久の歴史に培われた 風格のある緑を守る

長い歴史の中で培われてきた古都奈良の緑を、風格のある歴史・文化的財産として、大切に守り育みます。

人と自然のかかわりを礎に 緑の文化を未来につなぐ

古くから人びとの生活を守り豊かにしてきた自然とのかかわりを大切にし、人びとの創意を集めて、新しい時代に引き継ぐ緑の文化を育みます。

森林、田園、まちの緑をささえる 人の“わ”を育む

奈良の多様な緑を知り、学び、楽しみ、緑を通して人のつながりを育み、緑をささえる仕組みをつくります。

4-2 緑の地域別目標と将来像

基本理念を受けて、奈良市を構成する3つの地域ごとに、その特性を活かした緑の将来象を以下のとおり構想します。

<奈良盆地地域>

市街地の三方を取り巻く大和青垣は、古都奈良の歴史的風土の骨格を形成し、また市街地の借景の緑として、今後とも保全・継承されます。

旧市街地南部に広がる農地を、平城京の条坊や条里制の跡を今に残す貴重な歴史的風土として位置づけ保全することで、全体として市街地を取り囲む環状の緑が構成されます。

市街地では、世界遺産や大規模公園（奈良公園）が緑の拠点として、また、社寺林、小規模な公園や広場を核に、河川や道路を活かした緑のネットワークにより点～線～面と広がる緑豊かなまちなみが形成されます。

<大和高原地域>

高原の自然条件を活かした農林業の活性化により、その基盤となる農地や山林等の緑が維持管理され、美しい山里の景観が継承されます。

山里や河川の緑は、ホタルが舞い飛ぶ豊かな自然環境を育むとともに、都市住民と自然とのふれあいの場となります。また、地域の自然や歴史的資源からなる緑は、ネットワークされ大和高原地域の自然や歴史を巡り楽しむ環境が提供されます。

<西部丘陵地地域>

西に矢田丘陵、東に西ノ京丘陵や春日山一帯の緑が望め、大和青垣の魅力的な自然景観を享受できるとともに、樹林、河川やため池など丘陵地の面影を残す骨格的な緑が今後とも維持されます。

公園や教育・文化施設等の緑が地域の緑の核として保全され、河川や道路などが緑の軸となり核を結び、さらに住宅地に新たな緑が創出されることで、全体として自然と共生する緑豊かな住宅市街地が形成されます。

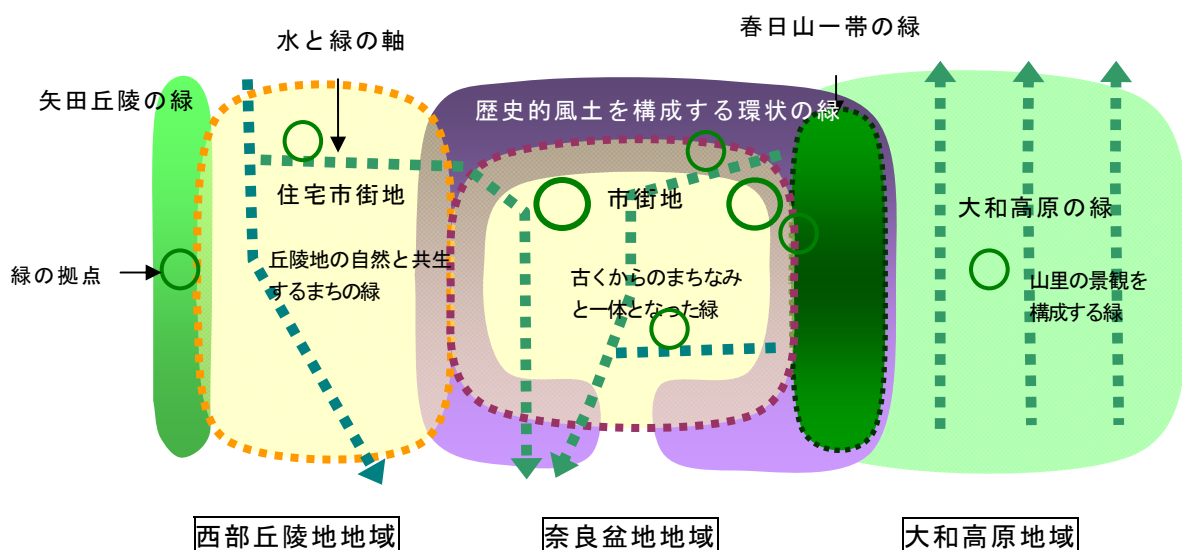


図 14 緑の将来像図

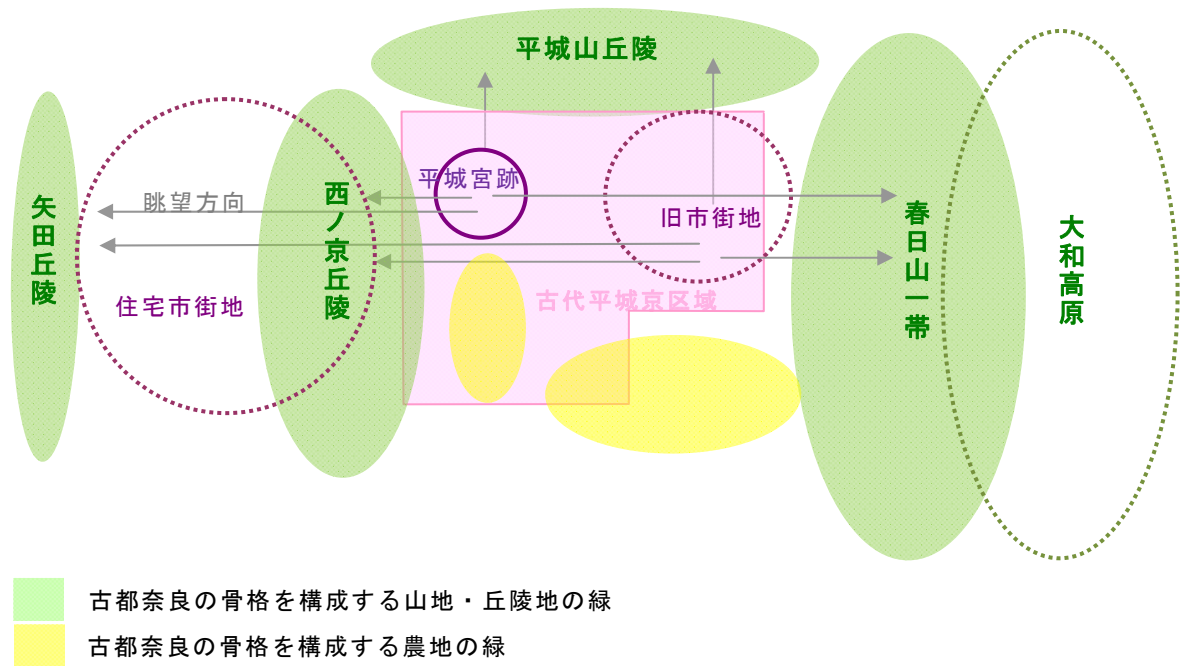


図 15 古都奈良の骨格を構成する緑の概念図

4-3 緑の確保目標

(1) 計画フレームの設定

奈良市第4次総合計画との整合を図るとともに、今後の都市動向を勘案し、人口フレームおよび市街地規模を以下のとおり設定します。

表 1 人口フレームおよび市街地規模の設定

年次	現況 (H23. 4. 1)	中間年次 (H32)	目標年次 (H42)
全市人口 (人)	367, 717	350, 000	310, 000
都市計画区域人口 (人)	359, 794	336, 607	302, 345
市街化区域人口 (人)	325, 011	306, 106	276, 611
都市計画区域の規模 (ha)	21, 160	21, 160	21, 160
市街化区域の規模 (ha)	4, 839	4, 870	4, 900

※現況の全市人口は住民基本台帳による。

※全市将来人口については、奈良市第4次総合計画における将来見通し人口

※都市計画区域将来人口については、将来人口推計の出生中位人口

※市街化区域人口については、住民基本台帳による地区ごとの市街化区域面積割合と出生中位人口により算出

(2) 緑地の確保目標量

表 2 都市公園等として整備すべき緑地の目標水準

年次	現況 (H23. 4. 1)	中間年次 (H32)	目標年次 (H42)
都市公園 (㎡/人)	6. 2	6. 7	7. 8
大規模公園を含む場合	19. 9	21. 2	24. 4
都市公園等 (㎡/人)	6. 7	7. 6	9. 0

※目標水準は市域人口1人当たりとして算出。

※大規模公園とは、奈良公園、平城宮跡歴史公園を指す。(現在精査中であるものは未計上)

※都市公園等には、都市公園の他にちびっ子広場、史跡公園等を含む。

表 3 緑化の目標

年次	現況 (H23)	目標年次 (H42)	備考
都市公園 (%)	66. 5	70. 0	街区公園に限る
その他公共施設 (%)	21. 7	25. 0	

※都市公園の緑化率は、街区公園の規模別サンプリング調査による。

※その他公共施設は、公共の学校教育施設(幼稚園、小・中学校など)、文化・スポーツ施設、保健福祉施設、医療施設および官公庁舎を対象としている。調査方法は、航空写真からの植栽地面積の判読。

4-4 地域別方針

(1) 奈良盆地地域

古都の歴史的環境と調和した緑のまちづくりを進める

① 市街地の緑

旧市街地および周辺には、国宝・重要文化財や史跡・名勝に指定された貴重な歴史的資源が多いほか、由緒ある社寺や遺跡、古墳、古いまちなみなどがみられます。また、世界遺産に登録されている8資産群およびその周辺の緑は、建造物と一体となって歴史的景観を構成し、訪れる人々には季節や安らぎを感じさせる心地よい環境を提供しています。さらに旧市街地周辺の市街地においても、大和青垣の緑が借景となり、住環境としての価値をさらに高めています。こうした緑の重要性をふまえ、市民・事業者・行政が連携して、国際文化観光都市・奈良にふさわしい緑のまちづくりを進めます。

このため、世界遺産をはじめとする歴史・文化遺産を核に、周辺市街地を含めた緑の保全・育成を進めるとともに、奈良公園および平城宮跡歴史公園については、古都奈良の緑の観光拠点として保全・整備を促進します。

また、市民の快適で安全な生活環境の向上や古都奈良の魅力をさらに高めるため、身近な緑の保全・活用および配置、緑のネットワークの形成を目指します。近年市街化が進行した市街地については、市民・事業者・行政が連携して、緑の維持管理の充実や地域の緑化を進めます。

1 歴史・文化遺産を核とした緑の保全・育成

世界遺産に登録された東大寺、興福寺、春日大社等の社寺林は、歴史的環境を構成する貴重な緑であるため、将来にわたり適切な管理のもとに保全を図ります。

世界遺産の緩衝地帯（バッファゾーン）は、環境や景観を保全し遺産を重層的に守るため、既存の樹林等の緑の保全に努めるとともに、遺産を直接的に保護する緑化を進めます。

また、点在する古墳、社寺林や景観木等は、貴重な歴史的資源として、また地域のランドマークとして保全・育成を図るとともに、これらをつなぐ緑のネットワークの形成を目指します。

歴史的なまちなみの残る地域については、観光振興、景観形成や生活環境向上の視点から、地域特性をふまえた緑の保全・創出を図ります。



東大寺の緑(世界遺産区域に含まれる)



「歴史の道」沿いの寺院(般若寺)

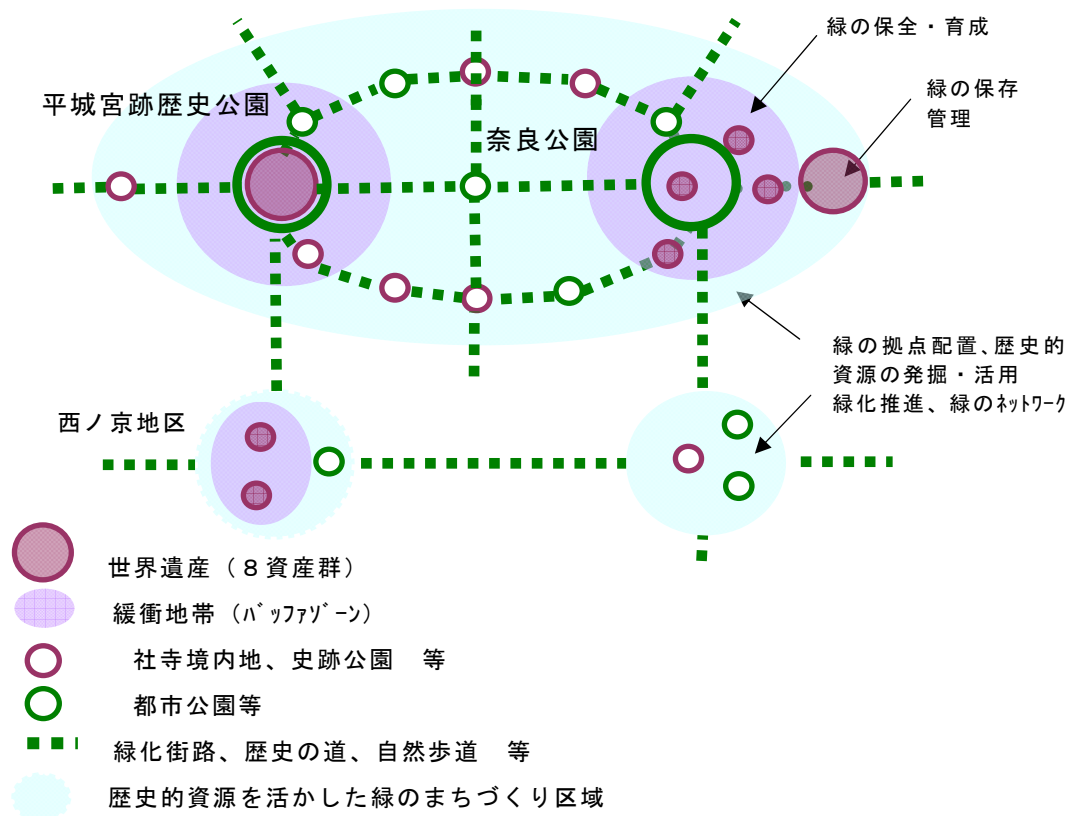


図 16 歴史・文化遺産を核とした緑の保全・育成の概念図

2 古都奈良の2極緑化拠点の形成

国際文化観光都市・奈良の観光活性化拠点として、奈良公園と平城宮跡歴史公園を位置づけ、整備を促進します。

奈良公園は、約 502ha の広大な地域にまたがり、貴重な歴史的文化遗产を包蔵する東大寺、興福寺や春日大社、保存のための文化施設である国立博物館、正倉院などや、これらを取り巻く雄大で豊かな緑の自然美と調和した、他に類のない歴史的公園とも称される公園です。また、この豊かな緑地景観は、鹿との共生によってつくられた特色ある景観を形成しています。

また、平城京の北部中央に、東西約 1.3km、南北約 1km の地を占める平城宮跡は、従前より発掘調査・研究成果を活かした遺跡の保存整備が進められてきましたが、我が国を代表する歴史・文化資産として、より一層の保存・活用を図るため、平成 20 年度に国営公園として整備されることが決定しました。平城宮跡は、



観光拠点となっている奈良公園



平城宮跡(都市公園化)

自然植物は少ないものの、池沼、湿地、草地など多様な自然的環境を有し、多くの鳥類や昆虫類等が生息しており、貴重な緑のオープンスペースとして散策、自然観察等のレクリエーションに活用されています。

これらを国際文化観光都市・奈良の緑の拠点として位置づけ、保存・整備することにより、自然・歴史・文化が調和した雄大な空間の創出を図ります。

3 憩いと快適、安全・安心な緑のまちづくり

奈良を訪れる人を迎える玄関口となる近鉄奈良駅、JR奈良駅は、花と緑による修景など、国際文化観光都市にふさわしい風格のある緑の創出を図ります。

緑の少ない旧市街地にあっては、社寺林や庭園等の歴史的資源と一体をなす緑の保全を図るとともに、生活環境の向上、防災機能の強化の視点から、公園や広場等の確保や教育施設等の公共公益施設における緑化を推進します。

とくに歴史的なまちなみの残る地区については、都市景観や防災に配慮した緑の配置のあり方について検討を行い、魅力あるまちなみ景観の形成とともに、安全・安心な市街地環境の形成を目指します。

市街地を流れる河川やため池は、良好な自然と潤いを提供し、都市環境の向上や野生動植物の生息・生育に資する緑地であるため、その水辺環境を保全します。また、生態系を乱す外来種への対応や地域の特性に配慮した緑化に努めます。

とくに佐保川、秋篠川については、「水と緑の環境軸」として位置づけ、街路（道路）や旧街道とともに有効に活用し、歴史的資源等をつなぐ緑のネットワークを形成します。

新たに市街地開発事業等により整備される市街地については、街路緑化を進めるとともに適切な公園緑地の配置を行い、快適な都市環境の形成を図ります。



まちなかに復原された宮跡庭園



佐保川沿いの散策路

② 歴史的風土を構成する環状の緑

景観 10 年、風景 100 年、風土 1000 年という言葉借りれば、大和青垣の緑は長い歴史の中で培われてきた風土をかたちづくる緑といえます。

春日山一帯の緑は東大寺や春日大社とのかかわりの中で育まれ、また北部の平城山丘陵、西部の西ノ京丘陵、矢田丘陵の緑は、平城京の時代から古都の借景を構成する重要な緑となっています。また、旧市街地南部に広がる農地も、平城京の条坊や条里制の跡を今に残す貴重な歴史的風土といえます。

これらの歴史的風土を構成する重要な緑を後世に引き継いでいくため、市民・事業者・行政が協働した取組みを推進します。

1 歴史的風土を象徴する大和青垣の保全・育成

大和青垣の緑は、豊かな自然環境を有し、多種多様な動植物が生息・生育する場であるため、貴重な緑地として保全します。

市街地を取り囲む山地や丘陵地の青垣の緑は、地形的な特徴から、奈良らしい歴史的風土の基盤となっており、これらは、奈良のランドスケープを形成する重要な要素となっています。

とくに平城宮跡、西ノ京から東山を望む景観は、本市特有の眺望景観として位置づけられており、その景観資源の維持・保全を図ります。

荒廃森林等については、自然環境、景観に配慮した植林や自然を活かした身近なレクリエーションの場としての活用等を検討します。



平城山丘陵の緑(若草山より)

2 古都奈良を取り巻く田園の緑の保全・育成

旧市街地南部に広がる農地は、都市近郊農業としての特性を活かした農業振興の中で保全を図ります。

また、地域を流れる佐保川等の河川や格子状に広がる農業用水路、ため池等については、農業用水としての水量の確保と水質の保全を図るとともに、田園景観保全の視点から、水辺の環境整備に努めます。

西ノ京東部の一団の農地は、世界遺産に登録された唐招提寺や薬師寺を重層的に守る緩衝地帯として位置づけられているため、歴史的景観に配慮した土地利用の誘導を図るとともに、朱雀門から南に伸びる朱雀大路跡（国営公園となる史跡区域を除く）については、緑の歴



南部に広がる田園景観



ため池と農地がおりなす田園景観
(横井町周辺)

史シンボル軸として位置づけ、歴史緑地帯の形成、南北ビスタラインの確保を目指し、周辺の農地の保全・活用を図ります。

3 春日山一帯の緑の保全・育成

春日山一帯の緑には、若草山、春日山、高円山へとつながり、古都奈良における文化的景観を構成する資産として世界遺産に登録された「春日山原始林」が広がっています。

春日山原始林を中心に、奈良の鹿や春日大社のナギ樹林等の多種多様な動植物が生息・生育する環境の維持・向上を図るため、緑地の保全を図ります。

新日本三大夜景の一つに認定された若草山は、古都奈良の新春を彩る風物詩の山焼きや山頂から東大寺、興福寺など、奈良ならではの景観が眺望できる観光拠点となっています。

その若草山と高円山とは、奈良奥山ドライブウェイで結ばれ、また、若草山山頂から春日山原始林へ通じる春日山遊歩道や東海自然歩道（旧柳生街道）・滝坂の道によるネットワークにより、歴史・文化とのふれあいを楽しみ、学び、四季折々の変化が体験できる場として、適正に維持管理を行います。



春日山原始林の林内の様子



鹿が遊ぶ若草山から見る春日山原始林

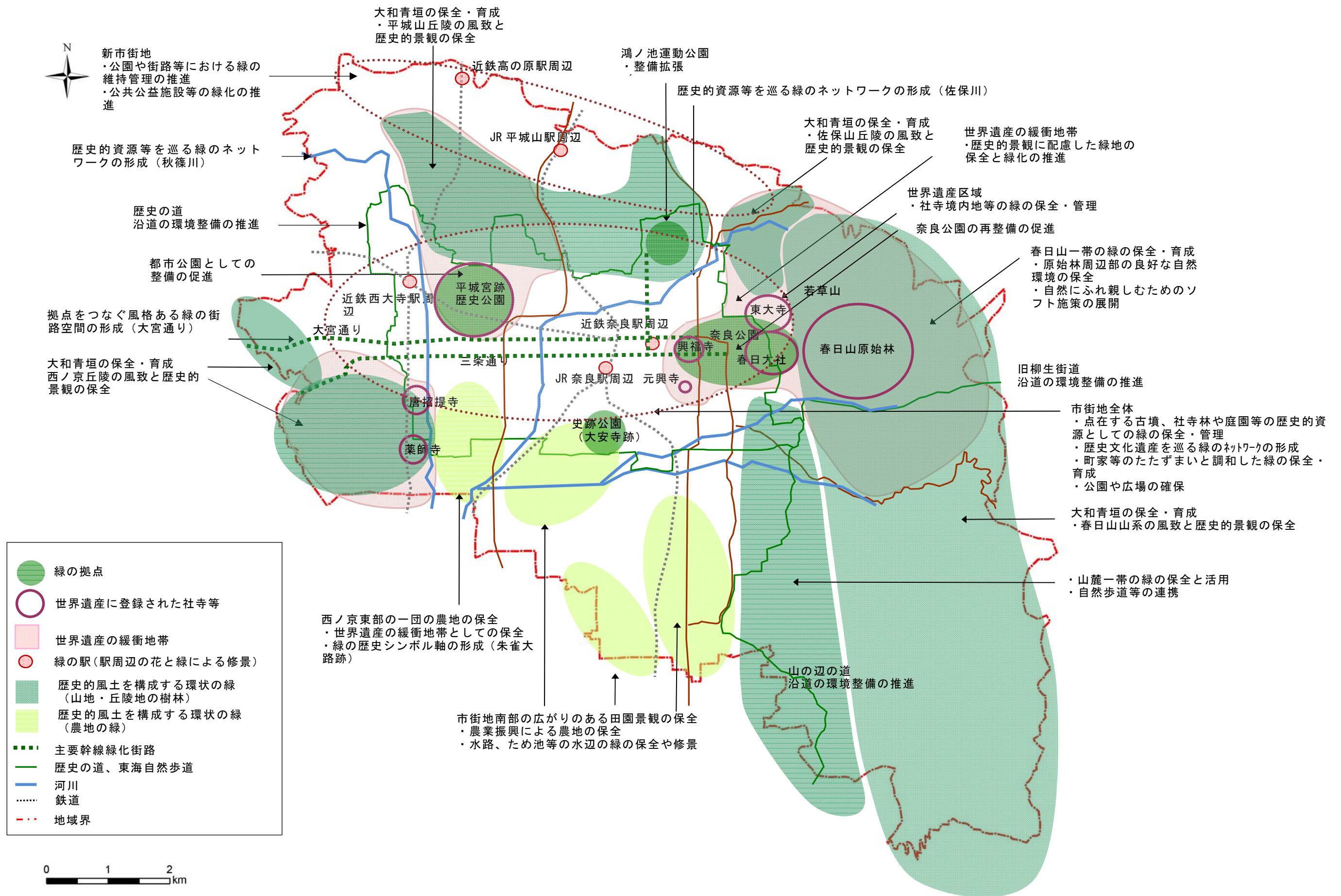


図 17 奈良盆地地域の緑の配置方針図

（２）大和高原地域

生業の緑を育み美しい山里の景観を継承する

大和高原地域は、奈良市域の東半分を占め、都市部とは気候や地形条件が異なる地域の中に豊かな自然環境が広がり、それを活かした農林業が営まれています。

緑地の大半は森林であり、川沿いに開けた土地に田畑が広がる美しい山里の景観を有しています。

この美しい山里の景観を保全し、農林業の活性化対策等による生産活動により緑の保全・育成を進めます。また、恵まれた自然環境の保全・育成を図るとともに、地域の自然・歴史的資源の活用を図り、都市との交流を基本としたふれあいの場となる緑の拠点づくりを進めます。

1 山里の景観の骨格となる緑の保全

大和高原の山なみや山麓の田園は、これまで古都奈良の奥座敷としての機能を持ちつつ、培われてきた地域の骨格をなす緑といえます。

しかし、遊休農地の増大など緑地の荒廃が進み、その対策が求められています。

このため、荒廃山林や遊休農地の農林業的利用を通じた緑の再生やレクリエーション機能としての利用を検討し、地域の骨格をなす緑地の保全を図り、山なみや山麓の田園からなる良好な山里景観の維持・形成を目指します。



大柳生地区の山里景観（背後に地域風土の骨格となる山系が連なる）

2 生産活動を軸とした緑の保全・育成

地域特有の景観を醸し出している茶畑や果樹園については、農業振興の視点から、農地としての生産性を高める事業展開により、景観の維持・保全を図ります。

また、農業景観を阻害する遊休農地については、その実態を把握するとともに、農地の流動化を促進し、農地としての管理水準を上げることで、景観の維持・向上を図ります。

また森林については、健全な育成に努めるとともに、自然体験学習など多様なニーズに応えるフィールドとして活用を図り、伝統的建築の用材等の用途に対応した樹木の育成を行うなど、市場との関係を新たに確保しながら、維持・育成を図ります。



月ヶ瀬の梅林



茶畑の景観

3 恵まれた自然環境の保全・育成

ホタルが舞い飛ぶ河川やため池等の水辺は、優れた自然環境であり地域の財産であるため、これを保全し、次世代に継承していきます。

このため、希少な生物の生息・生育環境となっている白砂川等の河川の最上流部から木津川合流付近までの連続する谷筋や湿地等の自然環境の保全を図り、地域全体として、ホタルの里づくりを目指します。

さらに、本地域が最上流域に位置することから、ゴルフ場における環境改善など、水資源の涵養、環境負荷軽減に資する森林の育成等に努めます。



白砂川の水辺景観



スズラン群落(都祁・吐山)

4 交流を基本とした緑の拠点づくり

豊かな歴史資源や自然資源、農産物等を活かし、都市・農村の交流の場となる緑の拠点づくりを進めます。

地域内に多く分布する社寺については、その歴史・文化的価値を見直し、観光・レクリエーション資源として必要なトイレ、休憩スペース等の充実や周辺の緑の保全・活用を促進します。

さらに豊かな自然とのふれあいの場として、野外活動拠点の機能充実やダム湖等を活用した水と緑の名所づくりなどを進めます。



奈良市青少年野外活動センター

5 地域の自然・歴史的資源の活用

月ヶ瀬溪谷等の自然や社寺等は、地域の優れた自然・歴史的資源であるため、その価値を見直し、地域固有の歴史的風土として保全するとともに、観光・レクリエーションの場として整備します。

歴史的ないわれなどが残る柳生地区等については、歴史的たたずまいを感じる環境づくりを目指します。

また、梅やお茶などの特産物、温泉など多様な地域資源を活かすとともに、多機能型サービスエリアとして、地域情報の発信など各種の交流機能を備えた道の駅「針テラス」を核とする緑の交流拠点づくりにより、市内外との交流を推進し、さらに、地域の自然的・歴史的資源をつなぐ緑の周遊型ネットワークルートとして、河畔の道や旧街道を位置づけ、周辺とともに環境整備を進めます。



月ヶ瀬溪谷の景観



地域の歴史を語り伝える歴史遺産
(旧柳生藩家老屋敷)

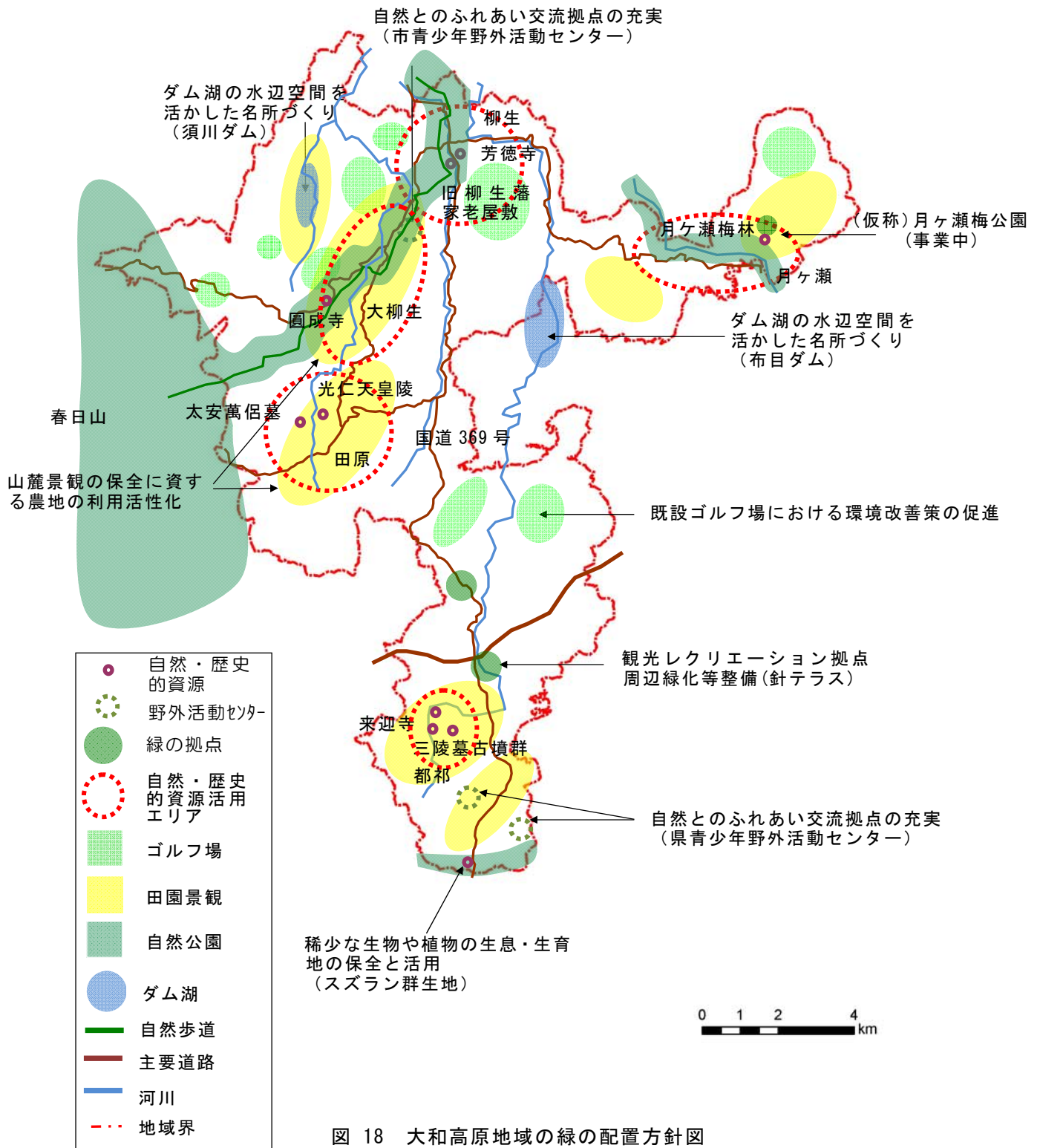


図 18 大和高原地域の緑の配置方針図

（３）西部丘陵地地域

丘陵地の自然に育まれた緑豊かな住環境を形成する

西部丘陵地地域では、西端の矢田丘陵と富雄川沿いの緑が地域の骨格的な緑を構成しています。また、住宅市街地の中にも、丘陵地のなごりを示す谷地やため池、一団の樹林地が残されています。

今後は、丘陵地の骨格的な緑の保全や残された水と緑の環境の保全・活用を図るとともに、身近な公園緑地の配置、河川や街路、その他の公共公益施設の緑化など、きめ細かな取組みを展開し、緑豊かな住環境の形成を目指します。

① 新興住宅市街地の緑

今後は、緑の多い成熟した郊外住宅地を維持・育成するとともに、新しい市街地整備が見込まれる住宅地等については、周辺の自然環境・生活環境に調和した緑の保全・創出が求められています。

また、地域的には、道路や公園等の整備が十分でない地区もあり、再整備も含めた施設整備を推進します。

1 丘陵地の自然を活かした緑豊かな住宅地の形成

主として西ノ京丘陵に位置するこの地域は、昭和 30 年以降に、急激かつ大規模な開発によって新しい市街地に生まれ変わり、大阪近郊の良好な住宅地として発展してきました。しかし住民の高齢化が進み、その第 2 世代が地域の中核を担う時期を迎えつつあります。

今後は、成熟した郊外住宅地の緑を育成するとともに、新しい市街地整備が見込まれる住宅地等については、周辺の自然環境・生活環境と調和した緑豊かなまちづくりを目指します。

また、地域的には、道路や公園などの整備が十分でない地区もあり、再整備も含めた整備を行い、緑の充実を図ります。

緑のネットワークを構成する道路・河川の緑化を進めるとともに、適切な管理を行います。とくに、本市への道路の玄関口に当たる場所については、奈良を感じる緑化を道路管理者に働きかけます。

文化・教育施設が多く立地する地域であるため、それぞれの施設の良好な環境形成と景観に配慮した緑の保全・育成を図ります。



傾斜地での宅地内緑化（蛙股池周辺）



きめ細かな小規模公園の配置（菖蒲上池の北部）

2 地域資源を活かした緑のオアシスづくり

住宅地が広がるこの地域の緑は、ゴルフ場の広大な緑、大淵池等の比較的大きなため池の緑、住宅市街地を流れる河川の緑や大淵池公園が骨格となり、特徴となっています。

これらの緑は、市民に身近な自然環境であり、様々な動植物の生息地であるため、その貴重な水辺環境を保全し、緑のもつ、環境の向上、景観形成、レクリエーション等の機能の向上を図るとともに、住宅地内の緑化の促進により、緑のオアシスの形成を目指します。

由緒ある社寺や文化施設などの緑は、地域の核となる緑であり、地域の緑化を促進するモデルとなるため、所有者等の理解を得た緑化を進めます。

これらの地域の緑の資源を「奈良ウォーキングマップ」のコースに位置づけられた道路や河川でネットワークし、快適な空間の確保とともに、点の緑を線、面に広げていくことを目指します。



大淵池と周辺緑地

3 水と緑のネットワークの形成

緑のネットワークは、点の緑を線、面に広げていく上で重要であり、市民にとっては安全、快適に移動できる道空間の確保という面で欠かせないものといえます。

このため、住宅市街地の中の公園や公共公益施設、ため池などの緑のオアシスをつなぎ、市民が気軽に散策を楽しめる水と緑のネットワークを形成します。緑化街路や旧街道、川辺の道、自然歩道などを活用します。

また、ネットワーク拠点となる鉄道駅やバス停などは、花や緑による修景を施すなど（緑の駅、緑のバス停）、快適性の向上に努めます。

本地域を水源とする富雄川と秋篠川（上流域）や点在するため池は、多様な水辺の自然環境を構成していることから、生きものとふれあえる環境づくりに配慮します。また、生態系を乱す外来種への対応や地域の特性に配慮した緑化に努めます。



秋篠川沿いのサクラ並木と散策路

② 矢田丘陵の緑

本地域の西端に位置する矢田丘陵は、南北方向の緑の骨格を構成するとともに、市街地から望み見られる本市の西の青垣の一つとなっており、動植物の生息・生育環境としても重要な役割を担っています。

このため、都市環境や景観構成および自然生態系などの保全の視点から、西の青垣を構成する丘陵地の緑の保全・活用を目指します。

1 西の青垣を構成する緑の保全・育成

矢田丘陵のスカイラインを構成する山なみの枢要な緑については、保全を強化するとともに、荒廃しつつある緑地については、保全・育成の視点から、自然を活かしたレクリエーション活用や市民参加型の里山管理について、所有者等の理解・協力を得ながら検討を行います。

また、里山の自然緑地であることを活かし、里山のビオトープづくりや自然学習のフィールドとしての活用などについても検討します。

山麓部については、既に指定されている法制度により、丘陵地の周辺に広がる住宅市街地や田園景観の保全に努めます。

丘陵地内の各種の施設（飛鳥カンツリー倶楽部、帝塚山大学、近畿大学農学部等）や既存の自然歩道（矢田丘陵遊歩道）との連携を図り、多様な自然に触れ、楽しむことのできる散策路のネットワークの形成を図ります。



矢田丘陵の山なみ（富雄川より）



丘陵地の中を巡る自然歩道

